



# プロジェクトニュース

## シエラレオネ 地域開発能力向上 (CDCD) プロジェクト

「北から南、そして全国へ」号

2012年3月22日 (Vol.25)

### 目次

はじめに ー全国ネットワーク作りー

#### 1. 現場活動の実況中継

実況中継 1. 北から南、そして全国へ

実況中継 2. 住民と行政の対話を確保する



シエラレオネ



プロジェクト対象県

2. 新連載！ 専門家の一日：待つ、根回しする、我慢する

3. プロジェクト進捗報告

3.1 県開発モデル構築：フィーダー道路パイロットプロジェクト

3.2 村落開発モデル構築：モデルワードプロジェクト

4. 特別企画：カウンターパートからのメッセージ

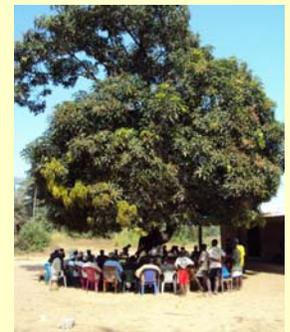
5. あの供与機材は、今、。。

6. 現地研修を終了してー気遣いと根気の要る工程を経験ー

7. 大好評のコラム

7.1 シエラのチカラ ー魔術による犯人捜しと防犯対策ー

7.2 ごつつあんです、シエラレオネ！第20話 ーシエラレオネーのフライドチキンー



\*プロジェクトHPにもアクセスください：<http://www.jica.go.jp/project/sierraleone/0901171/index.html>

## はじめに ー全国ネットワーク作りー

今回で 25 回目の発行となりましたプロジェクトニュースは専門家の活動、カウンターパートの活躍など、現場の活動をお伝えする記事が満載です。これまで培ってきたプロジェクトの経験を基に、全国を見据えた活動が増えてきたことは特筆すべきことでしょう。

2 月終わりにカンビア県・ポートルコ県議会（北部州にあります）のカウンターパートが、シエラレオネ南部にあるボ県、プジョン県に視察に行きました（詳細は、反町専門家による実況中継 1 をご覧ください）。その視察で我々専門家も同行したのですが、プロジェクト対象地域以外を訪問し、関係者の皆さんと意見交換することは非常に有意義かつ刺激的であり、我々にとっても学びの多い機会になりました。



ハマターンシーズンの夕陽。砂煙で太陽の形がくっきり見える

ボ市職員との意見交換会が終了後、ボ市長は自ら車を運転して、市内にある市議会の事業現場を案内してくれました。業者に委託するのではなく、直営で事業を成し遂げたことへの誇りの表れでもありました。同市長の発案で、毎週ラジオで市民と直接対話する機会を設けているそうで、市民からも好評だそうです。しかも市議会がラジオ局に使用料を支払っています。なるほど去年の県市議会評価で全国 1 位になる行政の一端を垣間見ることが出来ました。フットワークが軽く、実行力があり、信念に基づいて人々を引っ張る市長の姿には感銘を受けました。

3 月に行った県・村落開発ハンドブック委員会会議では、本プロジェクト対象地域以外の計 6 県市議会の首席行政官に出席していただきました。他県からの貴重な意見や助言は非常に有益であることは言うまでもありません。

地方自治地域開発省が主催した Local Economic Development(LED)ワークショップ全国大会では、参加者である全国の地方行政関係者に向けて、本プロジェクトの取り組みを伝えることが出来ました。

これらは活動の一部ですが、対象県であるカンビア・ポートルコ県の活動で得た地方行政と住民が協働する事業管理のあり方を、シエラレオネ全国へ発信していく機会が増えてきました。これからは、本省と県議会関係者がより前面に出て、本プロジェクトの成果や教訓を全国に普及する戦略を具体化し、実践していくこととなります。また、シエラレオネ全国を見据えて、行政関係者のネットワーク作りにも少しでも貢献していきたいと考えています。



道路を歩く村の人たち

(平林リーダー)

\*\*\*\*\*

## 1. 現場活動の実況中継

### 実況中継 1. シエラレオネの北から南、そして全国へ ―研修計画―

研修計画では、2月下旬に南部州のボ市議会・プジョン県議会への視察を実施しました。ボ市は、ボ県の県都でフリータウンに次ぐシエラレオネ第2の都市です。プジョン県は、リベリア国境に接する南部州の県で、リベリアの内戦当時は多くのリベリア人がプジョン県にも避難してきたそうです。



最初の訪問先であるボ市議会は、2011年の県・市議会評価で全国第1位となりました（ポートルコ県は3位、カンビア県は5位）。地方議会評価で1位になったボ市議会から、ポートルコ県、カンビア県のカウンターパートが行政の運営・管理方法を学ぶため、ボ市議会を訪問しました。

ボ市議会では、首席行政官から書類の管理方法・体制、歳入強化のために実施している税金の徴収方法等、ボ市議会の行政運営・管理方法を紹介していただきました。

ボ市議会首席行政官の「行政とは公正・公平であり、住民との対話を心がける」という言葉が印象的でした。また、市長をはじめとする市議会がひとつの組織として機能するために日々努めているというボ市議会の姿勢に、カウンターパートだけではなく、私たち専門家も感心するばかりでした。



ボ市議会首席行政官による説明（ボ市議会にて）

意見交換の際にはカウンターパートから、ボ市議会の行政の運営・管理方法に感銘を受けたという言葉が聞かれ、目で見て学ぶことの意義を私自身も再認識しました。カンビア、ポートルコ県で、これらの学びがどう活かされていくのか、継続してフォローしていきたいと思います。

ボ市議会で得た多くの学びから CDCD プロジェクトで目指す地方行政の姿が、うっすらと見えてきたように感じます。そして、私たちのカウンターパートは、もっとスキルアップできるという可能性も得ました。

ボ市議会での視察とは対照的に、プジョン県では CDCD プロジェクトの カウンターパートが講師となり、CDCD プロジェクトでこれまで得た成果や課題・教訓等をプジョン県の職員へ伝えるワークショップを開催しました。



プジョン県議会正面玄関

CDCD プロジェクトと今まで接点がなかったプジョン県を結びつけたのは、プジョン県議会の副首席行政官のフォファナ氏です。フォファナ氏は、昨年の 11 月までカンビア県議会で副首席行政官として勤務し、カンビア県の CDCD プロジェクトマネージャーとして活躍していました。

南部の遠く離れたプジョン県議会議会に異動後、フォファナ氏は、プジョン県議会の地域開発能力強化の必要性を強く感じたそうです。そしてフォファナ氏から「地域開発能力を向上させるために CDCD プロジェクトの成果や教訓を共有し、地域開発を実施する際のお手本にしたい。」という要請を受け、今回のプジョン県への訪問が実現しました。



プジョン県議会議会で説明するフォファナ氏

意見交換の際は、プジョン県議会の職員たちから様々な質問があがりました。その質問にカウンターパートが自分たちの経験を踏まえ丁寧に回答していました。人に伝えることで、彼ら自身もこれまで CDCD プロジェクトを通して得た学びを再確認できたと思います。

ワークショップの終わりに、プジョン県議会の職員からは、CDCD プロジェクトの現場を視察し、プロジェクトの実施手法を見たいとの要望がありました。今回の視察をきっかけに、ボ市議会、プジョン県議会との協力関係を強化し、さらなる意見交換の場を作る支援をしていきたい、と思います。

今後も研修計画では、このような視察を通じ、シエラレオネの北から南、そして全国へと CDCD プロジェクトを広めるとともに、全国の地方議会からグッドプラクティスを学ぶきっかけを作りたいと思います。

反町専門家（研修計画担当）

\*\*\*\*\*

## 実況中継 2. 住民と行政の対話を確保するー村落開発モデル構築：モデルワードプロジェクトー

カウンターパート機関の一つであるポートルコ県議会は、地方行政の草の根レベルにあたるワード委員会及び村開発委員会を通じてニーズ調査を行い関係機関と調整を行った上で、学校校舎建設と学校改修の 2 案件の実施を決定しました。

3 月 13 日、待ちに待った工事現場の引き渡し式が行われました。引き渡し式は単なる式典ではなく、地域住民への啓発も兼ねた活動となります。県議会副首席行政官からのプロジェクト概要説明に続いて、ポートルコ県議会のエンジニアであるハッサン氏が集まった住民と施工業者に対して淡々と事業の説明をしていきます。



学校校舎建設の現場引き渡し式

ハッサン氏は、当初専門家から提案された内容であっても、説明する際には自分の言葉としてメッセージを伝えます。

どのようにプロジェクトを県議会が監理していくのか、地域住民、特に村落開発委員会や学校管理委員会に期待されているコミュニティ・モニタリングの意義、目的とその実施方法、工事の途中で発生するトラブルへの対処方針などを説明していきます。

実際に施設建設をする村落には、社会的地位の異なる様々な老若男女が存在しています。集落内での意思決定に、若者や女性からの参加を促す仕組みを既存の村内組織に組み込んだ村落開発委員会を活用することで、より有効な村落開発が可能になる、と政策レベルでも認識されています。

帰りの車中で、「CDCD プロジェクトでは県議会と住民との対話が確保されているので、住民の誤解やトラブルが生じない。他のプロジェクトでもそうしたらいいのになあ」といった会話がカウンターパート職員の間で交わされていました。県議会職員の実務を通じて、プロジェクトでの取り組みの意図が徐々に浸透しているようです。

佐藤専門家（村落開発担当）

\*\*\*\*\*

## 2. 専門家の一日（プラス一日）ー待つ、根回しする、我慢する、それも重要な業務ー

ある日の朝5時。毎朝ポートロコ県宿舍の門の外からは大声で怒鳴っている人の声が聞こえます。隣家から朝食のための杵をつく音、子供をしかる声が交錯しています。それでも、昼間の事務所はスタッフ、カウンターパートが入り乱れ、てんやわんやなので、早朝は落ち着いて資料のまとめをするのに最適です。

朝食を食べ8:30 事務所に出動です。今日の予定は、カンビア県で改修した道路の瑕疵検査とポートロコ県の道路で住民との維持管理ミーティングです。9時半にカンビア県の事務所に行くと、業者と珍しく道路局のエンジニアが時間通りに来ました。ただ、肝心の県議会エンジニアがいません。彼に電話しても応答がありません。他の職員と雑談しながら“待ち”ます。

30分後、プロジェクトスタッフに彼の家に行ってもらいました。聞けばマラリアとのこと。しかたありません。そうすると、首席行政官に別の職員を指名してもらわなければいけません。技術移転が目的の技術協力プロジェクト。勝手にプロジェクトを進めるわけにはいきません。



学校校舎改修の現場引き渡し式



ポートロコ事務所の様子。この日は、プロジェクト国内支援委員の落合教授が訪問されています。

肝心の首席行政官は議長との重要な会議のようです。とりあえず、“待ち”ます。隙間時間に報告書を読みます、書きます。予定の時間から2時間遅れの11時半に、ようやく首席行政官から道路局のエンジニアに全権を委任する命を受け、現場に出発しました。事前に時間があつたため、道路局エンジニアへの検査の“根回し”が十分にでき、スムーズに終了しました。



ポルトロコ県の現場での住民とのミーティング。事前に担当官（左から5, 6人目）との打合せ中。

“根回し”とは、この場合、事前に方法や実施のイメージを共有し、円滑かつ主体的にカウンターパートが業務をこなすために必要です。回数を重ねることで、根回しなしに実施できるようになり、それがカウンターパートの身になっていくのです。

3時間遅れて、午後3時半にポルトロコ県の事務所に到着しました。評価担当官、県議会エンジニアとミーティングです。しかし、肝心の評価担当官がいません。評価担当官は激しい腹痛のため帰宅したとのことでした。これもしかたありません。彼の回復を“待つ”ために予定を明日に延期しました。

翌日。体調の戻らない評価担当官の代わりに、彼の上司である開発担当官、村落開発担当官が、自身の予定を終えてから現場に行くことになりました。彼らの自主性を重んじ、作業の遅れを“我慢し”つつ、やんわりと出発を促し、ひたすら彼らの仕事が終わるのを“待ち”ます。その間、今日の作業の“根回し”に時間がとれました。午後2時ようやく現場に出発です。現場では村人がちゃんと待っていました。担当官による維持管理の説明が始まります。2人の間でも役割分担され、うまく説明していました。

カウンターパートが主体的に業務を実施している場合、専門家は多少の意見の相違は“我慢して”ただしません。啓発が必要なき、議論が收拾しないときなどは助言します。さすがに趣旨の違うことを説明した時はその説明を正します。



長くかかったカンビア県での瑕疵検査。県議会の代わりに道路局エンジニア（左端）が大活躍でした。

例えば、維持管理の説明を住民にした時、県議会エンジニアが、“維持管理費はJICAプロジェクトから支払われる”（本来は、県議会が予算から払う）と説明した時は、あやうく“仮想ちゃぶ台”をひっくり返しそうになり、横からつつこみました。間違いに気づいた周りのエンジニアがすぐに村人に修正しました。こういう間違いをしつつ成長していくので、“我慢”は必要です。午後5時過ぎ、住民との説明を終え、カウンターパートと途中の食堂で一息ついてから帰宅しました。

この2日間は、待って、根回して、我慢しました。時間がかかりますが、これも技術協力プロジェクトでカウンターパートの能力向上を図る専門家の重要な業務です。1年目はやって見せました。2年目は主体的に実施してもらうために、そして、何が必要でどうしたらよいのか考えてもらうために、こういう機会は重要なのです。さて、昼間は落ち着いて座れなかったので、早朝またレポートのまとめです。

宿谷専門家（道路計画・設計/施工管理担当）

\*\*\*\*\*

### 3. プロジェクトの進捗報告

2011 年度実施予定の主な事業		
主な活動	予定	進捗状況
県・村落開発ハンドブックの草案及び普及計画の策定	2011 年 5 月までに目次案を作成。 2011 年 6 月からハンドブックの草案作業を行う。	3 月 6 日に第 2 回県・村落開発ハンドブック委員会開催。カンビア・ポートロコ県議会の加え、他 6 市県議会の首席行政官も出席し、県・村落開発ハンドブック第一案の内容について協議。
村落開発モデル構築：モデルワードプロジェクト	フェーズ 1 (2011 年 6 月～2012 年 5 月)：カンビア県 4 件、ポートロコ県 2 件 (社会・経済基盤整備) のモデルワードプロジェクト支援を通じ、村落開発モデルの構築を行う。	6 つのモデルワードにおける業者調達支援を行った。また、これまでの支援で得た教訓を整理し、モデルワードプロジェクト開始当初に作成した詳細計画の改訂作業を進めた。
県開発モデル構築：フィーダー道路・カルバート改修パイロットプロジェクト フェーズ 1 ターム 2	フィーダー道路改修計画を支援し、県議会の実施体制と機能把握、課題を抽出し来年度開始するモデル事業のモデル案を作成する。 ターム 2 改修工事内容： ポートロコ県：道路全長 11.8km, カルバート 30 箇所、表面排水溝 5 箇所 カンビア県：道路全長 15.1km, カルバート 32 箇所、表面排水溝 5 箇所	両県における工事は予定よりも早いペースで進む。県議会及び道路局権事務所による施工管理・維持管理の支援・助言を行う。  フィーダー道路局長による現場視察及び県議会と施工管理・維持管理体制について協議。工事完了したフェーズ 1 ターム 1 の瑕疵検査実施。
研修事業	県議会職員、ワード委員会メンバーへの国内研修、第三国研修。パイロットプロジェクトのインパクト調査実施。	カウンターパートの BO 市議会、Pujehun 県へのスタディツアー実施。北部州 5 県の県議会職員向けの調達研修準備 (国内研修委託先の ILO との協議)。ワード委員会に対し、人間の安全保障・草の根無償にかかる説明会実施。研修効果を測るモニタリングの仕組み・方法案を県議会と協議。
村落開発ポリシー策定	村落開発ポリシー作成タスクフォースメンバーとして、同案作成を支援、2011 年中に草案をまとめ閣議に提出。	閣議審議結果フォロー。村落開発ハンドブック印刷支援の準備。

\*\*\*\*\*

#### 3.1 県開発モデル構築・フィーダー道路改修プロジェクト：2 年目はあきらめず、主体的に

シエラレオネでは、都市間を結ぶ幹線道路から離れた農村地域を結ぶ道路はフィーダー道路と呼ばれています。そのほとんどはアスファルト舗装されておらず、その状態の改良と機能の維持は担当部局である道路局・県議会の課題です。フィーダー道路改修プロジェクトは、2 年目に入り、カウンターパートの能力向上を目指し、道路計画の策定、他のセクター、特に道路局と県議会の協調、維持管理の実施をテーマに事業を実施しています。

フィーダー道路改修工事ですが、工事開始から3か月がたち、いよいよ作業も中盤に差し掛かってきました。2年目は、ポートロコ県、カンビア県とも1業者ずつ選定していますが、当初より両業者とも真摯に工事を進捗させ、2月末までは予定通り進んでいます。それは、ひとえに施工監理の賜物でもあります。適切な手順により、なるべく適切な業者を選定したのですが、やはりシエラレオネの業者の質は高くありません。忙しい道路局のエンジニア、県議会のエンジニアが共同で監理することにより、補完しあう体制を作っています。

3月に入り、ポートロコ県の工事の進捗が遅くなってきました。週に1度は現場を確認していますが、前週と比較して業務が進んでいないようです。多忙で現場にいけない道路局のエンジニアに代わり、ポートロコ県のエンジニア、ハッサン氏と施工監理に行った時のこと、いつも通り、業者に指示をしたのですが、その後のハッサン氏は浮かない顔で無口です。

「毎回同じ指示をしても進捗しない。もう疲れた、。」。そんなに深刻な遅れではないのですが、指示に従わない業者とのやり取りに飽きたようです。「そうしたら、誰が監理するんだ。解決策を模索するのがエンジニアの仕事ではないの?」たまには叱咤激励も必要です。その後、道路局のエンジニアを交えて工程を話し合うことにしました。**現場監理では、どんな状況でもあきらめずに真剣に解決策を探る姿勢、それが重要です。**

3月は維持管理にかかる体制の整備も本格化してきました。施工後の維持管理は県議会が管理者となり、道路局の技術的サポートのもと、道路沿線から選ばれた住民が構成するローカルコントラクターと協働して、主体的に実施することになっています。現在、ターム1(2011年)に改修した2県4路線について、住民からローカルコントラクターを選定し研修を実施しました。ローカルコントラクター選定は、県議会の仕事です。問題が起きないように、体制が継続するように地元の伝統的チーフ、議員に説明し、選定基準を設定し、地元で選定してもらうように説明しました。

概ね13言語が存在するシエラレオネ。公用語であるクリオ語が話せる、仕事状況を書きとめるために読み書きができる、ことは重要なメンバーの選定基準です。また、県議会の開発担当官の提案により、各村で村落開発委員会を設立し、維持管理活動を主体的に実施するようにしました。さすがは、コミュニティと近い距離で働いている県議会、具体的ないい提案です。

### 【今月のエンジニア】



ポートロコ県議会エンジニアのハッサン氏。プロジェクトより供与されたコンピュータとデザインソフトを利用し、研修を受けています。県議会の仕事で多忙な中、時間をやりくりし、プロジェクトチームと作業をする中で新しい知識の吸収、それが彼のモチベーションでもあるそうです。



維持管理研修。フィーダー道路部局長(右端)が村人に説明。



県議会に維持管理用機材の転圧機を供与。道路局のサポートを受けつつ利用します。引き渡し式には、JICAフィールド事務所長(左から2番目)、フィーダー道路局長(右から2番目)に出席頂きました。

維持管理者が選定された後は、道路局のエンジニアによって研修が実施されます。道路局リーダー道路局の局長も登場し、映像、写真やイラストを用いてわかりやすく説明していました。村から選定された人たちも熱心に、休み時間も途切れることなく質問していました。その後に各村での実地研修です。実際に作業することで体で覚えてもらいます。さすがは、道路局のエンジニア、自分でも実践して見せることで住民にわかりやすく説明していました。

コミュニティ開発管理を担う県議会、そして、スペシャリストとして技術を提供する道路局。住民の社会経済基盤の改善のためには、両者の融合が必要で、一歩ずつですが良い関係が築けつつあり、お互いの尊重も感じられます。プロジェクトでは、この体制が全国に広まるようにさらにサポートし、経験を教訓としてまとめていきます。

宿谷専門家（道路計画・設計/施工管理担当）

\*\*\*\*\*

### 3.2. 村落開発モデル構築・モデルワードプロジェクト：やっと立てたスタートライン

モデルワードプロジェクトでは、パイロットプロジェクトを経た 32 ワードの能力評価の結果、村落開発モデル構築のために 12 ワードを選んで支援をしています。

現在進行中のモデルワードプロジェクトのフェーズ 1 では住民のニーズを収集する方法として、各村の資源の状況を報告してもらった上で、「1 年後に実現可能な夢」を各村で世代・男女のグループごとに話し合ってもらい、その結果を県議会が収集・分析・検討して各省庁県事務所と協議して決定するという方法を採用しました。

この方法の意図は、モデルワードで実施する案件の発掘だけでなく、開発計画を立てるためには「ニーズばかりでなく、村或いは地域にある資源の有無や現状データにより、総合的な視点で計画立案が可能になる」ことを県議会職員に体験してもらうためでした。



住民に説明する県議会職員

かつての作業では収集された資料が膨大に見えたためか、データ処理に直面した県議会職員の顔には明らかにためらいと困惑の色がありました。しかし、今では村ごとにデータを収集することの意義を明確に理解しているようです。「県議会が利用できる資源を考えると、村まで掘り下げないで調査をした方がいいだろう」とこの数か月間はアドバイスをしてきましたが、県議会職員の回答は思ってもいないほど積極的でした。

専門家からのアドバイスを待つまでもなく、「住民の中に『実施されるプロジェクトは自分で選んだプロジェクトだ』という思いがある限り、住民のプロジェクトへの理解も完成後の維持管理の持続性も高い」とか、「県開発計画を立てる上で既存計画の達成度を調べる必要があるが、ある施設の地域調査では

増減が相殺されてしまい変化を見ることができない。だから村ごとに個々の施設の状況を把握して、県開発計画の見直しを行う」といった過去にはなかった発言が県議会職員からありました。

フェーズ1が終わりに近づくなか、フェーズ2の下準備を進める上で、県議会職員自身が課題に気付き・取り組む姿勢に変化が見られます。県議会職員による課題への取り組みがスムーズにできるように、仕組みづくりをするのが専門家の本来業務です。人を変えるには時間がかかることを念頭におきつつも、県議会職員の思考回路や態度の変化を見て、フェーズ2を目前にして「ようやくスタートラインに立った」と感じました。

佐藤専門家（村落開発担当）

\*\*\*\*\*

#### 4. 特別企画：カウンターパートからのメッセージ

今回、私の現地研修期間中に可能な限り県議会職員にインタビューをし、CDCD プロジェクトについて熱く語っていただきました。CDCD プロジェクトが開始されて良かった点として一番多くあがったのが、コミュニティと県議会の距離を縮めたという声でした。また日本で研修を受けた職員の多くからは、研修内容が自身の業務に役立っている、他者から見てもパフォーマンスが向上している、ようです。またバイク供与によって、モニタリングがやりやすくなったという声も聞き逃せません。

他方、上げられた課題のほとんどは、会合を行う際の参加者への交通費や日当の支払いについてでした。一方で、県議会職員の中には村の組織(VDC)に会計役を置くことで、村での会合の交通費の支払いなどに対応できるのではないかと、という声もあり、プロジェクトとしても今後活用できるかもしれないと感じました。

期待としては、2014年10月以降もCDCDプロジェクトに継続して協力してほしいという声や、他県出身の職員からは自分の出身県でもCDCDプロジェクトを実施してほしいという声も聞こえました。以下は一部ですが、カウンターパートからの熱いメッセージを紹介します。



県議会の開発計画官と打ち合わせする池上ジュニア専門員

##### ①CDCD プロジェクトが来て良かったこと、ポジティブなインパクトは？

- CDCD プロジェクトは県議会が実際にコミュニティレベルでの事業を行うことを可能にした。結果CDCDプロジェクトが来たことで、県議会とコミュニティとのギャップが埋まったと感じる。
- CDCD プロジェクトが来たおかげで、モニタリングやスーパービジョンの方法を含め具体的に村落開発を行う方法を県議会は知ったと思う。
- 県での実践を中央政府に反映することに大きな意義があると思う。

- ・ 研修で日本に行ったが、内容が自分の分野にとっても適合していたので、帰国後もあらゆる仕事の面で役立っている。

## ② CDCD プロジェクトと仕事をする時の課題は？CDCD を通して乗り越えたいチャレンジは？

- ・ （自分は日本で研修を受け、震災後も外国を援助する JICA を見たのでそうではないが）他の県職員の中には、CDCD プロジェクトでの活動に参画しても日当が支払われないことを問題視する者も多くいる。
- ・ CDCD プロジェクトでも促進している村の村落開発の担い手としての村落開発委員会(VDC)など、村の既存組織を活用しても良いと考える。会合を実施した際の交通費等に支払いの問題等は、VDC に会計役を置くことで解決できることも多くあると考えられる。
- ・ CDCD プロジェクトでは何か決定する際にフリータウンからガーナ（場合によっては東京と）時間がかかる、という印象。
- ・ CDCD プロジェクトでは、専門家の多くがコンサルタントであることもあり頻繁に人材が入れ替わってしまう。

## ③ CDCD プロジェクトで得た教訓は？

- ・ CDCD プロジェクトのパイロット事業で自分の出身村で倉庫建設が実施された際に、住民内のグループが対立し、倉庫もダメージを受けるという事態が起こった。村での情報普及や合意形成が必要という教訓を得た。

池上 聖（経済基盤開発部 平和構築・都市・地域開発第二課 ジュニア専門員）

\*\*\*\*\*

## 5. あの供与機材は、今、。

私たちのプロジェクトでは、カウンターパート機関からの要請に基づいて、様々な機材が投入されています。バイク、コピー機、PC、プリンターなどなど。供与機材の効果は使用者の業務姿勢も把握して一つの報告となるかも知れません。

ある日の正午過ぎ、カンビア県議会にある用件で行った際に、財務部を訪問しました。お昼休み時間帯で、リラックスした職員が見られる中、財務官のパトリック・カマラ氏は個室で執務中でしたが、嫌な顔など見せず快く対応してくれました。私からは予算関連の情報提供を先ずお願いし、次に供与機材に関し彼の率直な意見なり考えなりを伺ってみましたところ、彼は次のように切り出しました。



県議会財務官のパトリック氏。

「能力向上は時間を要する課題です。私の国は安定せず、他の国が実現しているレベルまで当然到達していない。（中略）私自身、日本で研修の機会を得ることができ、日本人の勤務姿勢や時間管理に非常に感銘を受け、学ぶことができたのは幸いです。（中略）県議会の重要な役割はサービスデリバリーですが、

求められる現実とのギャップがあります。そのギャップを埋めるべき研修、技術習得を必要としますが、貴方のプロジェクトは正にそういった研修の機会や必要な機材を我々に提供してくれて、非常に感謝しています。ここで供与機材に関する質問ですが、私なりにはもう十分であり、これ以上は必要ないと思えます。」

そうコメントしながら、1枚の書類に目を通し始めました。これは忙しいのかと思いきや、彼なりの考えをまとめた原稿（税金徴収のスピーチに用意したもの）から、先ほどのコメントをされていた様でした。「機材は十分で現状必要ない」との回答は、意外でもありました（一般的にはもっと機材を提供してほしいとの声の方が多いのではないのでしょうか）。県議会が将来的にはインターネットにアクセスできること、そして外の世界をもっと知りたいと同氏は結びました。

田中専門家（業務調整）

\*\*\*\*\*

## 6. 現地研修を終えて ー気遣いと根気のいる工程を経験ー

2月1日から3月21日までジュニア専門員の現地研修で CDCD プロジェクトに受け入れていただきました。5月からは長期専門家としての赴任に向け、実務を通じて実りの多い時間を過ごさせていただきました。専門家の皆様、関係者の皆様には大変お世話になり、心からお礼申し上げます。

現地では、モデルワードプロジェクト第一フェーズの事業実施のための調達、つまり現地業者の選定及び契約を行う時期でした。

CDCD プロジェクトでは、シエラレオネの地方行政や村落開発に関連した法律や政策をいかに現場で実践していくか、すべてのプロセスでカウンタパートである県議会職員の能力強化を図りつつ、その方法を検討・検証しています。従って調達も、シエラレオネの調達法や慣習的な手順を尊重しつつ、日本の税金で実施されている JICA 事業の透明性と説明責任を担保した形で現地業者との契約を行います。これらの支援は



モデルワードプロジェクト事業の契約署名式。

**県議会とのやり取りを含め、本当に大変な気遣いと根気の要る工程でした。** 村落開発担当の佐藤専門家の調達支援を補佐する形で次期第二フェーズに向けて留意すべき点、教訓を得られたことは、本現地研修の最大の収穫といえます。

さらに、自分が5月から担当するモデルワードプロジェクト第二フェーズの計画立案・ニーズ調査について協議した際に、自身のアイデアを持ち、どのように実施すべきか本当に真剣に議論できる県議会職員に大いに刺激を受けました。第二フェーズに向けて、期待が高まっています。現地研修の機会を与えていただいたおかげで、今回の経験に基づいて準備をし、5月にはしっかりと心構えで戻ってこれる、と感謝しております。本当にありがとうございました。

池上 聖（経済基盤開発部 平和構築・都市・地域開発第二課 ジュニア専門員）

\*\*\*\*\*

## 7. 大好評のコラム：

### 7.1 コラム：シエラのチカラ —魔術による犯人捜しと防犯対策—

イスラム教やキリスト教の進出以前から、シエラレオネをはじめとする西アフリカには黒魔術が住民の生活の一部として存在しているようです。

詳しくはわからないのですが、日本でいうところの呪術みたいなものでしょうか。真剣に呪術に怯える様子や、呪術が絡んだドラマをじっと見ているシエラ人の様子から、彼らの心の奥底に祟りや呪いに対する恐怖があるのは明らかです。

この数か月、カウンターパートの役所施設内外で置き引きや盗難が相次いでおり、県議会職員はドアに新たなカギを取り付けるなど対策に余念がありません。しかし、先日、とある大きな物品が盗難に遭い、県議会全体が騒然となりました。

そこで、首席行政担当官は県議会として毅然とした態度を表明すべく、警察だけでなく黒魔術に頼ることを決意しました。儀式の全容をプロジェクト専門家らに説明する首席行政官の眼は大真面目で、我々も神妙に聞き入ります。儀式は数日間にわたって繰り広げられ、「物品を盗んだ泥棒には死が訪れる。泥棒について知っているものは申し出よ。死にたくなければ申し出よ」というメッセージが町全体に剣や箒や太鼓を持った魔女たちにより宣伝されます。首席行政官が見つめる中、儀式を見守る他の県議会職員も黙って見えています。我々も熱い眼差しで見守ります。防犯対策にも伝統を織り込むシエラレオネ、シエラのチカラここにありです。

佐藤専門家



儀式を司る魔女たち

\*\*\*\*\*

### 7.2 コラム：ごつつあんです！シエラレオネ 第20話 —シエラレオネのフライドチキン—

ポートルコ県一、いやいやシエラレオネのフライドチキンといっても過言ではありません。そのフライドチキンの味付けと揚げ具合は抜群です。プロジェクト専門家やナショナルスタッフ、県議会職員も大好き。一度食べたら、また食べたくなる一品をポートルコ県で楽しめます。

この名物フライドチキンをポートルコ県県議会に売りに来る女性は「チキンマミー」と呼ばれています。彼女の名前を知っている人は、私の周辺にはいません。チキンマミー。フライドチキンが彼女の名刺代わりになっています。

とても気さくで働き者のチキンマミー。チキンはわざわざ首都フリータウンに仕入れに行くそうです。値段も首都フリータウンよりも安く、とてもおいしい。



チキンマミー

お得です。将来チキンマミーは、シエラレオネ中にフライドチキンチェーン店を展開するのではないかと、いう噂さえごくごく一部にあるほどです。

シエラレオネでは、パンにいろいろなものをはさんで食べます。フライドチキンもパンにはさんで、はい、どうぞ。

もちろんフライドチキンだけでも楽しめます。その他には魚のフライ、牛肉の煮込みもありますよ。これまたパンと一緒に食べると絶妙のコンビネーションです。

ポートルコ県に行った際に、チキンマミーのフライドチキンが食べられないと非常に残念です。そうです。チキンマミーは毎日県議会に来るわけではないのです。

ですから、彼女が県議会に着たときは、専門家やスタッフから声が上がります。「チキンマミーが来た〜！」と。

チキンマミー、いつもありがとう。次回もシエラレオネのフライドチキンを食べられる日を楽しみにしています。



これがチキンマミーのフライドチキン



これがチキンマミーのバスケットの中身

ひらしゅらんの独断と偏見の評価：★★★★★。誰もが認めるシエラレオネのフライドチキン。

\*\*\*\*\*

次号へ続く

発行元：シエラレオネ 地域開発能力向上（CDCD）プロジェクト 編集長 平林

事務所：フリータウン事務所：地方自治地域開発省内、カンビア県事務所：同県議会内、ポートルコ県事務所：同県議会内

プロジェクト協力期間：2009年11月～2014年10月（5年間）

対象地域：カンビア県（25ワード：人口約30万人）、ポートルコ県（7ワード：人口約9万人）

カウンターパート：地方自治地域開発省、カンビア県議会、ポートルコ県議会

派遣専門家：平林リーダー、田中専門家（業務調整）、宿谷専門家（道路計画・設計/施工管理）、反町専門家（研修計画）、佐藤専門家（村落開発）、池上ジュニア専門員（村落開発）：2012年3月実績

